

博士論文要旨

戦後日本におけるレコードを通じて形成された外来音楽愛好 —シリアスな受容と文化的媒介者の役割

The Love and Appreciation of Imported Music through Recordings in Postwar Japan:
Their serious reception and their role as cultural intermediaries

大畠 徹

本論文は、第二次大戦後の日本におけるレコードを通じた外来音楽愛好の歴史的検討を行うものである。ここで「愛好」という言葉を用いるのは、教育・政策への導入や音楽スタイルの模倣などのすべてを含む受容全般から対象を限定するためである。外来音楽に特別な意味を付与し受容する趣味のあり方に問題を定め、4つの対象においてそれを検討する。特にレコード及びそれに関する言説の生産・流通・消費に携わる文化的媒介者の役割に注目し、特定の集団内で規範的価値が設定される過程を明らかにする。そして、それぞれに共通してみられるシリアスさという特徴についての考察を行う。

1章では鍵概念となる「文化的媒介者」の学説を整理した。そして、この概念について本論文では、媒介者による意味付けの行為に注視するだけでなく、その意味付けが意味あるものとして機能する社会領域の力学を検討するために採用することを説明した。

2章及び3章では、モダンジャズとロックのジャンル文化を検討し、そこではレコードに依拠するカノン枠組みが、文化的媒介者と消費者の相互関係によって形成され、愛好者集団の編成・再編成に重要な意味をもったことを明らかにした。

2章では、1950年代後半から1960年代のモダンジャズ導入期における音楽雑誌の動向に着目した。1950年代に導入されたモダンジャズの普及過程では、「名盤」という枠組みが強い影響力をもった。これに決定的な役割を果たしたのが、日本初のジャズ専門誌『スイングジャーナル(SJ)』である。既に日本のジャズ文化のなかで権威的地位にあったSJは、1950年代後半以降、この分野の「名盤」を選出し紹介することに努めた。直接の契機となったのは、1958年発足の「名盤蒐集会」である。これは、ジャズ専門レーベルの日本販売権を獲得したレコード会社がSJと協同し、著名な評論家の推薦盤を発売する企画であったが、結果として「名盤」を語る言説の呼び水となった。また

1960年代後半になると、SJは前衛ジャズへの「反動」を中古市場での廃盤人気に読み取り、「幻の名盤」キャンペーンを展開した。ここでは、1950年代中期のモダンジャズが「共通の場」とされ、その基準に沿ったレコードの発掘・復刻と知識の追加・体系化が促進された。日本のモダンジャズ愛好では、以上の専門的音楽雑誌の継続的な動きによって、規範的枠組みとしての「名盤」が提示され普及した。

「偉大な音楽家とそのレコード」に準拠する受容のあり方は、その後導入された様々なポピュラー音楽ジャンルに対しても展開されるようになる。とりわけロックにおいては、ブートレグ(ライブ演奏の盗み撮りや盗品テープをもとに製造された著作権法上違法なレコード)を用いて、ミュージシャンを理解しようとする愛好形態が一定の広がりを持った。3章では、1970年代以降のブートレグ・コレクターの動向に着目した。1960年代後半に珍奇なアイテムとして紹介され始めたブートレグは、1970年代以降、後発ロック雑誌の投稿欄などを通じて消費者同士の情報交換の場が築かれるようになり、マニア向け商品として認識されるようになった。ブートレグをもとに形成されていったロック受容のあり方とは、録音物を「資料」として扱い、ミュージシャンの側に設定された真正性に接近しようとするものであった。すなわち、録音された演奏の日付や場所を特定したり、他の演奏との違いを確認したりすることにより、ミュージシャンの全体像を理解するという学究的な受容であった。さらに1980年代半ばになると、ブートレグの流通量が飛躍的に増加し、その消費自体が、愛好者の社会空間意識に重要な意味を持つようになった。ブートレグが半合法的商品とされたり、出回る市場と正規の音楽産業との関係が築かれたことを背景として、それを購入すること自体が卓越化の指標とされるようになった。結果、ブートレグが多く出回る場所である西新宿が象徴化され、正しいコレクター「道」を進んだもののみ「巡礼」を許される「聖地」として、コレクターの心象のなかへ内面化されていった。

以上のように、ジャンル観念に規定された愛好空間では、ほぼ必ずといってよいほど、その領域内で機能するカノンが設定され、レコードは不可欠な資源となった。1980年代以降、都市の先端的文化においてテーマとなったのは、こうしたジャンル/カノンからの解放である。ジャンルや文化ヒエラルキーの「横断」が叫ばれ、それが現実のものとなったかのような現象が生じた。4章及び5章では、「ポストモダン」言説と結びついたサティ再評価～環境音楽の流行とクラブ文化の台頭について検討した。

4章では、「ポストモダン」現象の象徴的扱いを受けたレコード店と音楽普及の関係に着目した。美術洋書・輸入レコード店「アール・ヴィヴアン(AV)」のサティ再評価及び環境音楽の流行への関わり方を検討することにより、「横断」という「時代の気分」がいかに浮上し実体化されていたかを明ら

かにした。没後 50 年にあたる 1975 年を境に、サティ再評価の機運が高まった。これは、作曲家サティを音楽学的に見直すだけでなく、彼の生きた時代の分野横断的な芸術運動を呼びおこす契機ともなった。同年に開店した AV は、この動向にいち早く関与していった。芸術と日常生活の仲介を理念として掲げる事業体セゾングループの一組織であるという特殊な経営基盤を背景として、日本では無名の演奏家であるフランス人演奏家を、レコード、演奏会、活字媒体を通じて紹介していった。「軽さ」を称揚する文化人の言説と結びついたこの AV の展開は、紹介する文脈こそが重要な意味を持っており、秋川邦晴やトランソニック同人による再評価とは別の受容枠組みを提示するものであった。また、1980 年代になると、ブライアン・イーノのアンビエント・ミュージックの導入によって、「環境音楽」が流行し、サティもこのなかに包摂されていくが、AV が関与したのは、商業的流行としての「環境音楽」を牽制し、音と環境をめぐる超領域的な研究・実践として位置づけようとする知的運動であった。両者に見られる AV の、シリアスさと軽さ、芸術と商業の中間的位置取りは、ポストモダン論における「文化的媒介者」の定義に合致していた。すなわちサティ再評価～環境音楽の流行において AV が象徴的な存在であったのは、単に横断的芸術家を紹介したからではなく、その企業理念や活動展開そのものが横断的であり、またそうした活動を学術的言説が補完するというポストモダン現象・言説の直中に位置していたためでもあった。

5 章では、1980 年代後半以降のクラブ文化との関係から浮上した中古レコード渉猟に着目した。1980 年代初頭の都市文化のキーワードが「横断」であったとすれば、1980 年代後半のそれは「編集」であった。特に「編集」を称揚する言説と直接に結びついていったのは、客を踊らせるための「道具」としてレコードを用いるクラブ DJ の存在であった。音楽を既存の評価から分離し、ダンスのための機能へと「編集」する行為が、ジャンル/カノンの解体を予兆するポストモダン論と親和していった。だが歴史的に見た場合、DJ の役割で重要であったものの一つは、レコードを紹介し購買を促すというジャンル文化における音楽評論家のそれと共通する仕事であった。というのも、1990 年代日本のクラブ文化では、レコードで「踊る」ことよりも、レコードを「買う」ことの方が、その領域への参加に意味を持つ場合があったからである。クラブ文化は、限定された文脈で機能するマイクロな価値体系＝「サブカルチャー資本」が分散的に生じ、緩やかに接続していくことを特徴とするが、日本で顕著となったのは、「過去の膨大な音源」の発掘がサブカルチャー資本の決定的な要素とされ、中古レコードの過剰な消費が生じた点にある。5 章では、この「クラブ的」なレコード愛好の存在を浮かび上がらせ、人脈、情報源、回遊パターンの共有によって枠づけられた「編集のセンス」と、ダンス場でのプレイやレコード店での渉猟を理念化した「現場主義」の二つの価値規範が、レコードの発掘・消費を促し、また旧来的な愛好者から卓越化を図る指標とされていたことを明らかにした。

6章では、以上の検討から得られた知見をもとに結論を導いた。そこでは、戦後外来音楽愛好のシリアスさの争点は、音楽の種類や導入された文脈や時期に応じて違いはあるものの連続性を見いだせること、他方で、1980年代以前/以降で区分を設けることが可能であることを示した。

1970年代までに生じたジャンル文化の愛好(2章及び3章)では、では、レコードに依拠したカノン形成と反カノンの運動・言説との対立構図が明確であった。ジャズの「名盤」普及においては、評論家の言説が極めて重要な役割を果たしたが、彼らの読者に対する啓蒙的姿勢やレコードの紹介の仕方は、戦前クラシック評論家のそれを踏襲したものである。これを、前衛ジャズやロックなど、さらに新たに台頭した文化擁護者は批判し、対立的価値観を提示していたのだ。続くロック文化においては、ジャズのSJに相同する権威的媒体が、反カノンのため、アーティスト信奉者たちは、別の空間を拠点としていった。すなわち、愛好者に限定していれば、日本のジャンル受容では、ジャンルの「本物らしさ」をめぐる観念的指標以上に、レコードに依拠したカノンとそれへの対立軸(としての演奏実践や評論言説)という二項図式こそが重要な争点とされていた。

環境音楽(3章)やクラブ文化(4章)は、ジャンル/カノンからの解放を促す言説と結びついて立ち上がったものであるが、文化的媒介者によって新たにそれが再設定される側面があった。環境音楽においては、アンビエントの導入によって、サティ〜ケージ〜イーノを系譜的に接続する言説が自明なものとして語られるようになったし、クラブ文化では、レコード渉猟の基準がDJらによって提起されていた。「ポストモダン」時代の到来によって、音楽受容のあり方が根本的に変質したわけではない。

しかし1980年代以前/以降の愛好形態は、二つの点で分節できる。

一つ目は、媒介者による意味付けが強調される傾向が強まったということである。ジャズの名盤にせよロックのブーツレグにせよ、それを語る言説の、少なくとも表向きの目的は、ジャズ史を理解するためであるとか、アーティストの全体像を知るためというように、海の向こうの音楽・アーティストの側に向けられていた。一方、サティ再評価〜環境音楽においては、海外の音楽家たちは媒介者の価値観や主張に合わせて紹介されていった。またクラブ文化において既存の録音物を再文脈化することは、レコードを操るDJの行為だけでなく、活字媒体でのレコード紹介のような、従来の音楽評論家と同じ役割においても顕著であった。さらに、これら媒介者の側に力点が置かれた意味付けは、既に日本国内に存在するモノや言説を用いることにより成立していた。サティ再評価〜環境音楽では1920年代のサティ受容、1960年代以降のBGM論などの言説が、クラブ文化では、国内のレコード店に沈積されていたジャズやイーージーリスニングのレコードが、それぞれ新しい価値枠組みのなかで掘り起こされ、再利用されていった。その都度新しい外来音楽を取り入れるだけではな

く、かつての受容者の遺産が参照されるようになる。これが、1980年代以降の愛好形態の特徴の一つであった。

二つ目は、特定の文化的媒介者の権威的影響力が低下した代わりに、通俗的なもの、商業的なものとの距離が重要な意味を持つようになったことである。ジャズやロックの受容では音楽雑誌が権威的機関としての役割を担っていた。ただし両者の志向は対照的であった。SJはカノン形成を働きかけたのに対し、それに抗う形で創刊された『ニュー・ミュージック・マガジン』は反カノン主義であった。別の活字媒体を拠点とするブートレグ愛好者のコミュニティは、それへの反動として形成された側面がある。つまり、ジャンル受容者の分岐や対立の背景には、カノンと権威的活字媒体の相関関係があった。このような図式は、1980年代以降見えにくいものとなる。その代わりに、規範的価値が設定されその優越性が主張されていく際には、通俗的なもの、商業的なものから差異化する動きが顕著に現れるようになった。AV周辺で生じた環境音楽の理念化は、商業的な流行現象と自らの実践を差異化することによって生じたものであった。1980年代後半「ブートバブル」において、コレクターは新宿を「聖地」とすることで、表層的な消費行動との差異化を図っていった。クラブ文化では、特定のネットワークに参加しなければ理解できない価値体系を築いていった。どの時代においても外来音楽愛好者は非通俗的な趣味の愛好者であったが、その受容形態において通俗的なものからの差異化が表面化しやすくなったのは、1980年代以降であると考えられる。

以上によって本論文は、1970年代までのジャンル文化の愛好が、レコードに依拠したカノン設定を大きな争点としていたのに対し、1980年代以降の愛好形態では、それが一義的な問題ではなく、媒介者の側に力点が置かれた価値設定と、通俗的なもの、商業的なものとの距離が重要な意味を持つようになったことを明らかにした。